

回 想

高 木 貞 治

私が東大へ入学したのは、明治 27 年 (1894) であった。そのころの数学の学会は、物理と一緒になっており、‘東京数学物理学会’とよばれていた。後に長岡半太郎さんの発議で、この名称は‘日本数学物理学会’と改められたが、どちらも私たちは‘数物’という略称でよびならわしていた。長岡さんの提案は、東京の数物、京都の数物などといったものができない方がよかろう、というのであったようだ。

私は明治 30 年に大学を卒業し、数物の会員となったが、学生時代から数物の例会や年会には‘傍聴者’として出席したものである。例会は 8 月と 9 月を除き、毎月一回、第何回目かの土曜日に大学で行われ、菊池大麓、藤澤利喜太郎、田中館愛橘の諸先生や、中村清二さんなど当時一高の先生をしておられた若い人たちが出席された。私たち傍聴者も入れて 20 人ばかりで、今と比較すればさびしいものであった。年会はやや盛大で毎年 5 月に東京で開かれる例であったが、その後地方でも行われるようになり、同時に時期も 4 月になった。

私は明治 31 年にヨーロッパに行き 34 年に日本へ帰ったが、その翌年ごろから欧文の論文を載せる数物の記事が出るようになった。それより少し前の時期の学会では西洋の数学論文の英訳や、‘藤澤教授セミナー演習録’というものを刊行したりした。

英訳された論文のうち菊池先生が Gauss の超幾何関数の論文をラテン語から訳されたものは、西洋でも知られていた。それと藤澤先生や長岡さんが独、仏語から英訳された Gauss, Dirichlet, Kummer の級数論に関する論文をまとめて *Memoirs on Infinite Series* として学会から出版した。

セミナーというものを日本で初められたのは澤沢先生であるが、その報告が学会から出版されたのである。そのうちの 1 冊では、林鶴一君が e や π の超越性の証明を、吉江琢児君が等角写像の

理論を、私が Abel 方程式の理論を紹介した。

多分文部大臣をしておられた菊池先生の推輓によるものと思うが、明治 40 年関孝和の 200 回忌に贈位のことがあり、牛込の浄輪寺で奉告祭が行われた。関孝和といえ、それよりもずっと前、関奨学資金として 300 円が学会に寄附されてあり、学会ではその利子を賞金として懸賞論文を募集した。その第一回には澤田吾一氏が応募し受賞された。200 回忌のときには、関孝和記念の通俗講演会が開かれ、和算家の川北朝鄰氏、和算の理解者であった狩野亨吉氏などが講演され、盛会であった。学会主催の通俗講演会はその後何回か開かれ、あるときは、‘赤切符、青切符’を作つて、入場料それぞれ 50 銭、1 円とした。会場は法科の第何番教室であったか、かなり広い室がいつも満員となった。しかし、このような講演会は、事務があまり煩雑であったので長続きしなかつた。

会の事務を専門にする人をおくことができるようになったのは、ずつと後のことで、昔はわれわれが自身でかわるがわる会務を見たのである。物理の人と数学の人が一緒に委員になつたが、会計の役はよく数学の方へ廻された。私も何度か会計の帖簿づけの役を勤めさせられたことがある。委員長任期は 1 年とし、重任を許さないという規則を作つたが、廻り持ちで、私も何回か勤めねばならなかつた。

数学の欧文論文を載せる雑誌としては、数物記事のほか大学紀要が以前からあつたが、1910 年代に東北数学雑誌ができ、1920 年代には学士院記事にも短い論文が載るようになり、学研の日本数学輯報もできて、この方には比較的長い論文が載つた。数物記事には、数学と物理と両方の論文が載つたが、数学と物理との相互の関係が必ずしも緊密というのではなく、数物に数学部と物理部とを設けてはどうか、あるいは二つの学会にわかれてはどうか、という話も何回か出たことがある。終戦後にそれが実現して、日本数学会ができたわけである。

80年といえば、学会としても相当長い歴史をもつものといえよう。しかし年月は知らぬ間に経つものであるから、学会はやがて100年、200年の

歴史をもつようになるであろう。日本数学会はどこまでも発展を続けることを希望する。(談)

50 年前 入 会 の こ ろ

—東京数学物理学会の思い出—

小 倉 金 之 助

私が日本数学会の前身東京数学物理学会にはいつたのは1907年(明治40年)6月で、ちょうど今から50年前であつた。そのころの私は東京に定住してはなかつたが、熱心な会員の一人であつたので、ここに入会から1911年の春仙台に住むまでの、4年間の思い出を語つて、80周年お祝いの言葉といたしたい。

私は東京大学数学科の出身ではないが、前に同大学の化学科に1年ほどいた関係上、物理の方には知っている先生たちが多く、会に出席してもあまり孤独感を抱かなかつた。それに物理の方は、田中館愛橘さんと長岡半太郎さんが、いつも陣頭に立つておられたのに、数学の方では、藤澤利喜太郎さんも坂井英太郎さんも例会には殆ど見えなかつた。吉江琢児さんはいつも、高木貞治さんと中川銓吉さんもよく見えておられた。

また発表論文の数からいえば、数学も物理の半分くらいはあつたのに、なぜか本会は物理が主で、数学が添え物のような感じが濃厚であつた。ただ物理の方では大学や天文台・気象台などに関係のない人たちの発表がほとんどなかつたのに、数学の方ではいくぶんか趣きを異にしていた。和算家を別としても、福澤三八さん、三上義夫さん、澤山勇三郎さんのような、大学には全く無関係な数学者も時々見えられた。

いま1907~1910年間の本会記事に載つた、数学と物理の論文数と著者数をあげてみよう。また

	1907	1908	1909	1910	
数 学	論文数	12	6	8	10
	著者数	7	4	4	6
物 理	論文数	20	27	10	15
	著者数	12	15	7	14

(紙数の制限上) 数学の論文だけに限つて、著者

名と論文数をあげると、次のようになる。

1907	遠藤利貞(2)	川北朝鄰(1)
	林 鶴一(1)	中川銓吉(4)
	刈屋他人次郎(2)	内藤丈吉(1)
	福澤三八(1)	
1908	林 鶴一(2)	吉江琢児(1)
	三上義夫(1)	小倉金之助(2)
1909	林 鶴一(2)	中川銓吉(1)
	窪田忠彦(2)	小倉金之助(3)
1910	澤山勇三郎(1)	林 鶴一(2)
	三上義夫(2)	貝原良介(1)
	窪田忠彦(1)	小倉金之助(3)

論文の内容は、数論・代数が極めて少いし、解析も多くはなく、幾何をもつとも多い。代数や解析の不振は、すぐ前に活動された高木さんや樺正董さんなどの休憩と、藤原松三郎さんの留学にもよるだろう。そしてこれまで不振であつた幾何が、前面に出てきた時期であつた。(物理学者の側からも、貝原さんの三重直交等温面の研究が現われた)。中川さんが留学から帰られたことも、原因の一つであろう。

それに1907年は関孝和の200年忌に当たるためか、本会記事にも川北さん、遠藤さんの論文が載つたが、この期間はじつに和算史の転換期であつた。旧和算家の仕事が終つて、林さんの“和算における行列式”や、三上さんの“円理は関の発明か?”が、問題にされる時代が来たのである。

それなら当時の日本における主な数学論文は、本会記事だけで尽されたというべきであろうか? じつさい1908年にライプチヒで印刷中であつた三上さんの“Mathematical papers from the Far East”(1910)は例外としても、私たちは中川さんの非ユークリッド幾何学の論文(東京大学紀要, 1910)や、福澤三八さんの函数論の単行書